

だいはっしょう 第八章

わかとの 若殿との出逢い

しろ なか あたら さどうか うで みな わだい との ちょうなん
城の中でも新しい茶道家の腕について皆が話題にしていました。殿さまの長男が
かろう あたら さどうか なだか てまえ こんぼん み おんせん い
家老に「その新しい茶道家の名高いお点前を、今晚にでも見てみたい。温泉に行って、
てはず ととの い
手筈を整えてくれ」と言いました。

かしこ かろう い おんせん で
「畏まりました」と家老は言って、温泉へ出かけました。

かろう おんせん どうちやく おかみ ちゃ ゆ よやく い
家老は温泉に到着すると、「女将、茶の湯の予約をしたいのだが」と言いました。

らいしゅう おかみ い
「はい。来週はいかがですか」と女将は言いました。

こんぼん わかとの しろ あたら さどうか てまえ らん
「今晚はどうだ。若殿さまが城で新しい茶道家のお手前をご覧になりたいとおっしゃ
すこ せ た かろう おかみ い
っておる」と少し急き立てるように、家老は女将に言いました。

わかざみ こんぼん よやく い こんぼんかなら しろ い
「若君さまですか。はい、はい、今晚の予約を入れておきます。今晚必ず城に行かせ
おかみ こころよ こた
ます」と女将は快く答えました。

かろう さ あと おかみ い こんぼん わか
家老が去った後で、女将はゆきのところに行きました。「ゆきちゃん！今晚、若さま
しろ てまえ み あたら しんじゆ くびかざ いちばん
が城でああなたのお手前を見てみたいそうです。新しい真珠の首飾りと一番きれいな
きぬ きもの き い
絹の着物を着ていきなさい」と言いました。

ひ おんせん はや みせ おかみ しろ い みじたく
その日、温泉は早めに店じまいしました。女将はゆきが城に行くために身支度をする
てつだ ゆうこく しろ い わかとの へや あんない あと
のを手伝いました。その夕刻、ゆきは城に行きました。若殿の部屋に案内された後で、
おんせん さどうか もう ねが
「はじめまして。温泉の茶道家、ゆきと申します。どうぞよろしくお願ひします」と
い
ゆきは言いました。

どの わかとの い
「はじめまして、ゆき殿。よろしく」と若殿は言いました。

てまえ ひろう ほんとう たっしゃ さどうか まいばん
それからゆきはお点前を披露しました。「あなたは本当に達者な茶道家ですね。毎晩
き てまえ ひろう わかとの い
ここに来て、お点前を披露してください」と若殿は言いました。

ゆきは「^{まこと}誠^{そまつ}にお粗末ではございますが、^{のぞ}お望みでしたら、^{かなら}必ず^{まいばん}毎晩^きここに来て、お
^{ちや}茶^たを点^いて^{おんせん}させて^{かえ}いただきます」と言って、温泉に帰りました。

ゆきが去った後で、「^さあんな^{あと}美^{うつく}しくて^{たっしや}達者な^{さどうか}茶道家^みを見たことは^{いま}今まで^{ひめ}なかった。姫
のような^{ふうぼう}風貌だ。^{かのじよ}彼女の^しことを^{かのじよ}もっと^て知ら^つなければならん。彼女の^てことを^つ手を^し尽くし
て^{しら}調べて^{わかとの}おく^{かろう}ように」と^い若殿は家老に言いました。

^{かろう}家老は「^{のぞ}お望みとあれば、^{なん}何でも^{こた}いたします」と答えました。

[Yuki no Monogatari](http://www.TheJapanesePage.com) by Richard VanHouten
<http://www.TheJapanesePage.com>